

神社の杜（五十七）

『ホンモンジゴケ（本門寺苔）』

片柳 茂生

今秘かにブームとなっている苔。苔むした庭園、溪流に佇む苔、苔が生えている空間は何故か人にゆとりを与えてくれる気がしてなりません。今回はそんな数ある苔の中で特異な性格を持つているホンモンジゴケについて、御岳山の苔の愛好家、元ピジターセーター解説員の井口さんのお力を借りてお話しします。

ホンモンジゴケの名前の由来は、東京の池上本門寺で初めて見つかったことからその名が付いています。この苔が武蔵御嶽神社の境内に彩りと柔らかな静寂さを醸し出しているのです。



他の苔たちは、重金属の成分が大の苦手というより大敵なのに、ホンモンジゴケは銅のあるところでないとき生きていけないという性質をもっています。苔同士の生存競争のはて、銅の近くで生きる場所をみつけたホンモンジゴケ。銅成分を体に取り込み生きるすべてを身に着けました。神社の銅葺きの屋根の下、銅の灯籠の足元、銅があれば、ホンモンジゴケはこ機嫌、多少踏まれても、はがれても、気に入ったその場所は手ばなしません。



んだのでしょうか？

普通苔は子孫を増やすために粉状の胞子を風に乗せて旅をさせ、その胞子は気に入った場所に着地できるとそこで成長して新しい生活を始めます。ところがホンモンジゴケは全く違う方法で子孫を増やします。この苔の胞子は日本ではほとんど見られませんが、ホンモンジゴケは自分の体の一部、つまりクローンで生育場所を広げていくのです。それではどうやってこの山の中に移り住

んだのでしょうか？

その昔、御岳参りの無事を祈念して、地元の人々の足元は旅支度の草履、その神社にいたホンモンジゴケのクローンが草履の隙間に滑り込む。そして、御岳山までやってきた。たどり着いたそこには、立派な銅葺き屋根のお社が……。新天地をみつけたホンモンジゴケにとっては最高の幸せだったのではないのでしょうか。これはあくまで想像にすぎませんが、静かに変わらぬ、神社の風景をより味わい深いものにしてきてくれているホンモンジゴケは、今では神社の一部です。本殿の周りに敷き詰められた玉石の上、常磐堅磐社（旧本殿）、皇御孫命社の周りでその姿を見ることが出来ます。特に雨上がりは奇麗ですよ。ちっぼけな苔、けれど大きなドラマを参拝の折に感じてください。

あ と が き

まさに賛否両論の中開催された東京五輪とパラリンピック。日本選手の受賞や入賞の数はかつてない多さとなりました。コロナ禍の中、自国有利な環境はあつたかもしれませんが、選手たちが絶えず努力を積み重ねて得た結果であることは変わりません。また新種目では、皆で楽しみ、失敗しても「挑戦したこと自体を称えよう」という、国の隔たりのない新しい世界が垣間見えました。その一方で浮き彫りになった我が国の抱える問題については、これを機に反省し、良き方向へ向かうことを願うばかりです。

最後に、この半年間を無事に過ごせたことを御嶽大神に感謝し、毎年丁寧に教授下さる先生方、ご奉納頂きました皆様、各種祭典や行事に御協力・御協賛下さいました崇敬者の皆様、各所関係機関の皆様、厚く御礼申し上げます。また、西岡千鶴様、齋藤慎一先生玉稿を有難うございました。

令和三年 十月一日発行

〔年二回発行・非売品〕

編集 武蔵御嶽神社

TEL 〇四二八（七八）八五〇〇

FAX 〇四二八（七八）九七四一

印刷 ㈱成和印刷

http://www.musashimitakejin.jp/

武蔵御嶽神社  
公式SNS



facebook



instagram